医学校における栄養学教育の始まり（明治六年・大阪）

中室嘉祐

日本最初の洋式病院は文久元（一八六一）年開院の長崎養生所で、蘭医ポンペによって正式の医学教育が始まった。ポンペは各藩から集った医学生に、西洋医学の実地のほか、薬学生がなかったので、薬室にて処方箋調剤をも行わせた。特に栄養学の講義を行った記録はない。後任のボードウィンも、ポンペ同様であった。長崎に学んだ医学生は、西洋医学では、医師は調剤できると思ったに違いない。医学生は各地に帰り、医薬兼業の西洋医学を広め、幕府の医学所、大学東校、東京帝大でも医薬兼業の西洋医学が引き続き行われ、東京帝国大学附属医院では、明治四一年勅令による薬局長の発令まで医薬兼業の西洋医学が続いた。

明治となり、ボードウィンは浪華仮病院（国立大阪医学校病院）へ移った。同校は明治五年、全国的な学制改革により廃校となった。洋式病院の再建を望む熱心な府民の寄附金を基に、明治六（一八七三）年二月一五日府立大阪病院が開設され、廃校となった国立大阪医学校病院より高橋正純が院長に、蘭医エルメレンス Ermerins が教師に就任し、エルメレンス指導により日本最初の、完全な病院規則である「阪府病院各局規則・病院給食規則」ができた。医局と対等の薬局規則により、医局で発行する入院外来処方箋の調剤を薬局長の管理する薬局で行い、すなわち日本で最初の完全な病院医薬分業が始まった。また毎朝八時、エルメレンスの蘭語による医学講義が行われた。これら講義録は日本語に訳されて、エルメレンス講述、日講記聞双書として薬物学、産科学、病原各論、外科各論、医事雑報等として、大阪府は広く世に益するためにと、木版刷にて出版した。

日本では、麦、粟、稗等の混食が常食で、腹一杯白米飯を食べることが栄養と考えられていたとき、一八二七年英人 Prout は糖質、脂質、たんぱく質を三大栄養素とする発表を行い、一八三八年蘭人 Mulder は、たんぱく質こそ

最良の栄養素であるとし、これに Protein の名称を与えた。エルメレンスは和蘭において、これらの学説を習得して来朝し、一八七三年大阪病院での医学講義・薬物学（第二〇巻）において、彼はさらに無機質の重要性をも加えて、「蛋白質、脂質、糖質、無機塩類」の四大栄養素の重要性について講述した。さらに彼は開院に際し病院給食献立を指導し、毎日各等の昼食には魚を、夕食にはビーフステーキ・牛肉を献立した。当時日本一の経済都市である大阪の中心地、船場の商家での常食は「朝かゆや昼一菜に、夕茶漬（阪大宮本又次教授）」に比すると、現在からみても栄養豊富な病院給食が献立された。

エルメレンスは医学教育において、四大栄養素につき日本で最初に講述した医師であり、実際栄養学として、栄養豊富な、病院直営の病院給食を日本で最初に実践した偉大な医養学者である。

その後一九〇〇年代に至り、ビタミン類が発見されて、現在は五大栄養素時代となった。この病院は、のち府立大阪医科大学、大阪帝国大学、大阪大学附属病院へと発展し現在に至っている。

（奈良佐保女学院短期大学）

浅井図南『扁倉伝割解』をめぐって

荒木ひろし

『扁倉伝割解』は尾張藩医学訓導・浅井政直（図南・一七〇六―一七八二）が万感の抱負をこめて著わした『史記』扁鵲倉公列伝の註解書である。割解の語は扁鵲伝の中の「皮を割き、肌を解く」に由来する。解剖釈義して粗意を得たものという意味である。

浅井家は盛政（延斉）が医系を草創してより累代わが国に展開された伝統医学（漢方）の命脈を保持した。図南はその中興期に際して、祖父正純、父正仲らがひとたび根づかせた医方を更に浸透させ、明和・安永年間（十八世紀後半）以降の、その在り方を模索した先達の一人である。その活躍期は、吉益東洞が京都において万病一毒に約言される「古方」を唱え、『類聚方』に代表される方証相対、随証理剤の考え方を徹底化した独特の医学理論を実践した頃とほぼ同時期にあたる。